

『グローカリズムの実践』 井上昭夫著、日本地域社会研究所、2011年 金子 昭 Akira Kaneko

本書は冒頭から秀逸な文章で始まる。

現代文明は根本的な転換が求められる。それは単なる改善や改革ではなく、文明の根本的な有りようが刷新されなくてはならない。いわば文明が「脱皮」しなければならないのである。

「脱皮」といえば「蛇」だ。「蛇」は「長すぎる」(ルナル『博物誌』)。物理的・精神的に「長すぎる」ものは何か。それは、地域・個であるローカルと世界・全体であるグローバルとの間の距離である。

そこで今、求められているのは両者を橋渡しする「つなぎ」の構築力である。この「つなぎ」は大地をふんばる「亀」の象徴的働きだ。これに対して「蛇」は、火であり引き出しを象徴する。大地から火炎を吹き出して天へ向かう宇宙船こそ、まさに地と天とをつなぐ「蛇」と「亀」の姿に他ならない。

この目くるめくようなイメージの飛躍、卓越した連想力が、本書全体を通じて展開する基本的トーンである。

著者・井上昭夫が、おやさと研究所長時代の12年間に構想し、自ら行動に表してきたグローカル思想の実践記録が、本書『グローカリズムの実践』である。これは井上氏の創刊になる本誌『グローカル天理』に連載された「巻頭言」を集めたものであるが、今読み返してみても余人の追随を許さぬ迫力、独創力、実動力にあふれている。

読者は、あらゆる事象を「元の理」で読み解き、説き起こす井上「元の理」ワールドを堪能されるだろう。私自身も含め、教内外の数多くのファンが毎回、井上所長の「巻頭言」を楽しみに読んでいたのを思い出す。

「元の理」は常に井上氏の念頭にある。「元の理」の鏡を通して世界が見られると同時に、現実世界の中に「元の理」が反映される。それは、あたかも小宇宙と大宇宙が嵌合するマンダラの悟りの世界であり、時空を超えて相互に照応しあうインドラの網を連想させる無限の合わせ鏡のようだ。

初めて本書を手取る読者であれば、次々と繰り出される全120有余編の豊富な話題の中で乱反射する「元の理」の真実にめまいを起こされるかもしれない。「人間の退屈と神の退屈」、「クローン人間と天理教」、「ツタンカーメン王と薬師如来」、「ジャングルの中の日本庭園」、「天理エコモデルデザインセンターの実験」等々、タイトルからして人を圧倒させるイメージの奔出がある。

「元の理」とは、ローカルな言葉でグローバルな世界を表明しようとした天理教祖・中山みきの救済的人間宇宙論である。天理教学に携わる者は、だれもが学術的かつ実践的にこの人間宇宙論を自分の学問と信仰とで読み解いていかなければならない。

さらにいえば、「元の理」は、教祖のひながたの道の原則でもあり、きわめて求道的・実践的な内容を持つ。それゆえ、その「根」を全力で掘り抜く研鑽と修行を通じて、独自の「悟り」に至る体験を目指すことが要求される。

学問が活学たるためには、先人の引用反復に汲々したり、権威に右顧左眄したりしているようではいけない。己の学問と信仰によって、「元の理」で世界を説き起こし、世界の事象で「元

の理」を読み解いて見せよ。そしてそれを自ら実践せよ。これは親神からの“挑戦状”というわけである。

20世紀ロシアの独創的思想家ベルジャーエフは、自らのキリスト教的人間学的探究を自由と創造の概念に基づいて展開した。『グローカリズムの実践』は、「元の理」に発する自由で創造力に富んだ天理教的人間宇宙論が、井上氏の渾身のメッセージとして行間からほとぼしっている。しかもそれは明確に信仰的实践を促すメッセージである。天理教学は、常に未来形の天理教実践学でなければならないというのが、井上氏が所長時代にくり返し語っていた言葉である。

さて、シュヴァイツァーは、誰もが自分のランバレネを持っていると述べている。井上氏のランバレネはアフガン、インド、東アフリカ(ウガンダ)であった。とくにインドと東アフリカに関しては、井上氏自身が地域文化研究センターを天理大学に設置し、自ら生命をかけて学生を引率してチェックダムや土囊シェルターの建設を行った。(本書カバー表紙及び裏表紙のイメージ写真は、まさにローカルな土囊集落とグローバルな宇宙の調和を目指す、井上氏の夢の姿である)。

本書を読んだ我々は何をすればよいのだろうか。本書の力強い指針は何であろうか。

一つ言えることは、井上氏の亜流者、ミニチュア版になることではない、ということだ。そうではなく、井上氏のごとく自らの学問と信仰で教学研究を切り拓き、自らの実践現場に乗り出していくことである。そして現場での実践は、大向こうをうならせる活動ばかりではないし、そうした活動を目的にすべきではない。それは地味で地道に着実に、一步一步進められるのだ。実践者には、高い理想と共に、現実即して歩むリアリズムが求められるのである。シュヴァイツァーのランバレネでの実践がそうであったように。

いずれにしても肝要なのは、我々は我々自身のランバレネを発見し、そこに渾身の力で臨んでいくことである。『グローカリズムの実践』は、そのように読者一人ひとりに実存的決断を迫る書物なのである。

本書に加え、同じ日本地域社会研究所刊の井上氏の他の著作『中山みき「元の理」を読み解く』(2007)、『天理教の「世界化」と地域化』(2007)、『ユートエコトピア』(編著書、2009)の3冊もあわせ読めば、より立体的・重層的に井上「元の理」ワールドを理解することができるだろう。

